

2019年2月28日

内閣総理大臣 安倍晋三 様

「天皇代替わり」を先の戦争の反省の時とするよう要請します

日本バプテスト連盟
性差別問題特別委員会

天皇代替わりの日が近づいてきています。マスコミによる代替わりの宣伝の効果でしょうか、天皇への好意的報道や新しい元号を期待する声を耳にします。果たしてそれらのことがひとり一人の人権を大切にす新しい歩みへと導くのでしょうか。

先の戦争で多くのアジア、日本の人びとが犠牲になった原因の一つに統帥権が天皇にあったこと、皇民化教育が徹底されたことなどが考えられます。

降伏の条件をよくするために「もう一度戦果を挙げてから」という天皇の言葉は沖縄戦に賭けた彼のことばです。地上戦で島全体が戦場とされ、民間人をまきこみ県民の三人に一人が犠牲となりました。戦争が終わるや、沖縄が和平交渉の材料とされ、米軍に差し出されました。1947年9月19日、天皇が「米国が沖縄の軍事占領を継続することを希望している。」という「天皇メッセージ」がマッカーサー、マーシャル国務長官にも伝達され、(古関彰一、豊下梢彦『沖縄憲法なき戦後』参照)米軍の統治に影響を与えました。

沖縄自らの決定権ではなく、在日米軍の大半の基地を押し付けられ今日に至っています。沖縄戦において、1944年日本軍が中国戦線から沖縄入りし、性暴力が多発。軍の指揮のもと145か所の慰安所がつくられ、アジア、沖縄の女性たちが強制従軍「慰安婦」とされました。1945年の米軍の沖縄上陸直後より性暴力が横行。日本兵の従軍「慰安婦」が戦後米軍「慰安婦」とされた時もあります。そして今なお沖縄は駐留軍による性暴力の恐怖にさらされています。

首相の言う国家とはなんのでしょうか。一人の権力持つ者、天皇の存在、また天皇を担ぎ、政治利用しようとする勢力が絶対で、弱く小さい者たちが差別、疎外、傷つけられ、時に殺されていいのでしょうか。天皇制が性差別、セクシャルマイノリティ差別あらゆる差別をつくり出しています。また天皇の皇位継承にも、男性天皇、男系天皇しか認めない性差別が顕著です。その一家を象徴として、家族主義、「家」制度の押しつけが始まります。天皇制と政治、教育、宗教が結びつく悪果を痛いほど私たちは経験したはずです。

天皇代替わりを慶事として扱い、先の戦争の反省も一切なく、ナショナリズムに突き進む今、代替わりを前に、先の戦争の犠牲を想い、原因を吟味し深く反省し、一人一人の人権が大切にされる新しい歩みへと踏み出すよう要請します。